

主題「自己の適性等に応じた運動やスポーツの楽しみ方と心的エネルギーを獲得できる生徒」の育成

1 主題設定の理由

昨年度の本校での研究では、ICTを課題の解決に対して効果的かつ効率的に活用し、「身体的有能さの認知」を高め、「自己の適性等に応じた運動やスポーツの楽しみ方ができる生徒」の育成を目指して実践を行ってきた。クラウド活用としてデジタルポートフォリオや映像資料箱を通して、主観的な感覚と自分自身の実際の動きの差異を他者と確認し合い、修正点をお互いに理解した上で繰り返し練習することで、よりよい動きづくりにつなげることができた。一方で、学習成果が生徒の身体能力に起因することが多い体育分野では、全ての生徒に身体的有能さを認知させることには限界があった。

保健体育科においては、生涯スポーツの実践者を育成することが求められている。生徒が運動に向かい、継続するための心的エネルギーを獲得するために、運動への内発的動機づけを高めることが重要な課題とされている。運動への内発的動機づけは運動有能感の高まりによって強められると指摘されていることから、生涯スポーツを目指す保健体育の学習では、運動有能感を高める必要がある。

運動有能感は、「統制感」、「受容感」、「身体的有能さの認知」という三つの因子から構成され、各因子を高めるための手立てを工夫していくことは生涯スポーツの実践者を育成するためには必要不可欠であるといえる。昨年度までの成果と課題を生かし、「身体的有能さの認知」だけでなく、「統制感」や「受容感」の観点からも指導の工夫を行うことで、自己の適性等に応じた運動やスポーツとの多様な関わり方（する、みる、支える）を経験し、全ての生徒が運動やスポーツを肯定的に捉え、楽しさや喜びを味わわせることが可能となると考えられる。

そこで、今年度は、「自己の適性等に応じた運動やスポーツの楽しみ方と心的エネルギーを獲得できる生徒」の育成とし、「統制感」や「受容感」を高める手立てを充実させることで、運動有能感を更に高め、全ての生徒の生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現していきたい。

2 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させるための具体的な手立て

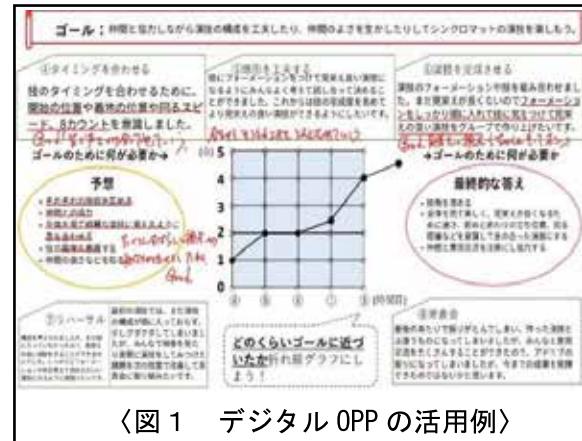
①協働学習モデル「ジグソー学習法」を取り入れた授業づくり

生徒一人一人が役割を自覚しながら、運動への多様な関わり方を経験できるようにするために、協働学習モデルであるジグソー学習法を取り入れる。本校のジグソー学習法では、活動の手順を大きく3段階に分ける。第1段階では、各グループでそれぞれの担当の部分（エキスパート）を決定する。続く第2段階では、他のグループの同エキスパートと、担当部分を深く理解する（以下エキスパート活動という）。そして最後の第3段階では、各エキスパートは学習した内容を元のグループにもち帰り、他のメンバーに教える（以下ジグソー活動という）。これらの段階を経ることで、効率よく動きを理解することができ、授業内の運動量の確保につながるものと考えられる。また、運動量を確保する中で、学び合いを積極的に促し、個々の技能の向上が期待できる。

エキスパート活動において、クラウド内にある理想とする動きや練習方法の例の映像を用いて、課題に応じて映像を選択し、課題を解決するために、「学習の個性化」を図り、一人一人の技術への理解や技能の習得を促していく。また、その活動を仲間から肯定的に評価される場面を意図的に設定することで、相互の認め合いが積極的に行われるようになり、「受容感」を高めることにつながるものと考えられる。

②デジタルワンページポートフォリオ(O P P)の活用

課題の達成のために繰り返される工夫とその成果の関係を分かりやすく簡単に把握できるポートフォリオを用いていく。学習過程がすぐに見て分かるように意図して、ワンページポートフォリオ(O P P)とし、生徒の振り返りに対し、肯定的なフィードバックを教師から働きかけることで、「指導の個別化」につながるようにしていく。また、工夫とその成果の関係は自分の経験だけでなく、仲間との経験からも理解できるため、ジグソー学習法での学習者同士の関わり合いと連動させながら、課題達成のための工夫が成果につながっていくことの理解を通して、「統制感」を高めていくようにする。さらに、ロイロノートの資料箱に3年間保管し、3年間の成長を各々が実感できるようにしていく。



〈図1 デジタルOPPの活用例〉

<ダンス/現代的なリズムのダンス>

一体的な充実に向けた手立て

- ①協働学習モデル「ジグソー学習法」を取り入れた授業づくり
- ②デジタルワンページポートフォリオ（OPP）の活用

<使用したアプリ等>
ロイロノート



カメラ

<本時の目標>（10時間中の4時間目）

動きのポイントを仲間と共有し、映像を通して自他の表現を確認することで、課題を発見し、合理的な解決に向けた運動の取り組み方を仲間に伝えることができる。

<エキスパート活動>担当パートの振り付けとポイントを確認する。

<学習活動>

- ・これまで身に付けてきた自分の担当場面の動きを映像を通して確認し、一連の動きで踊る。
- ・自分たちで作成したエキスパートシートや解説動画を確認し、グループに戻った時の教え方をエキスパート内で確認し、共有する。
- ・必要に応じてクラウド資料箱に入っている動きのポイントを確認し、グループの仲間の課題の解決を促せるように準備する。



クラウド資料箱でポイントを理解！



場面ごとの「動きのポイント動画」をクラウドで共有することで、生徒の主体的な練習を促し、自分のできていない動きを各自で抽出し、自分の課題に合った動きの理解や技能の習得ができるようとする。



エキスパートの仲間同士でポイントの伝え方についての話し合いを行うことで、場面ごとの動きのポイントをグループの仲間にどのように伝えれば分かりやすいかを考えることができるようになる。その際、エキスパートの中で、ポイント解説動画を作成することで、伝えることが苦手な生徒や技能的に苦手な生徒でも教え伝える活動が充実できるようになる。

<ジグソー活動>担当パートの振り付けとポイントをグループの仲間に伝える。

<学習活動>

- ・エキスパートが動きのポイントを伝える。
- ・ポイントを踏まえて、一連の動きで踊り、課題を見付ける。
- ・グループの仲間同士で課題に対する助言をしながら練習を行う。



自分たちで作成したポイント解説動画を活用した学び合い！



エキスパート活動で作成した映像資料やポイント解説動画を活用し、グループに演示をしながら仲間に伝えることで、技能に苦手意識のある生徒も担当パートの振り付けとポイントを分かりやすく、教え伝える活動が円滑に行うことができるようになる。

OPP に本時の振り返りをロイロノートで記入・提出し、振り返りの共有を行い、課題達成への成果に気付く。

<学習活動>

- ・OPP に本時の振り返りをロイロノートで記入・提出し、本時の課題に対する振り返りを行い、到達度を確認する。
- ・共有された仲間の振り返りを見て、課題達成への成果に気付く。



共有ノートで仲間の振り返りを自己の深い理解へ！



ロイロノートの共有ノートを活用し、仲間の振り返りも共有することで、自分の経験だけでなく、多くの仲間の経験からも課題の達成のための工夫とその成果を理解できるようになる。また、自己の教え、教わる学習方法に関する振り返りを行うことで、次回のジグソー学習に生かすことができるようになる。



運動やスポーツへの多様な関わり方を経験し、仲間から肯定的に評価される機会や場面を意図的に設定することで、「受容感」の高まりが見られた。また、OPP によって自己の成長を学習過程を経ることに認識していくことで、「統制感」の高まり、運動やスポーツを肯定的に捉えることができるようになった。

3 成果と課題

運動有能感調査において、ダンス単元の前後比較で対応のある t 検定を用い、分析を行った。

成果として、「統制感」においては、有意な向上がみられた $\{t(105)=4.763, p<.001\}$ (図 2)。これは、デジタル OPP の活用によって、学習につまずいた時にどこに戻ればよいか、自身の課題がどこにあるかが視覚的にも分かりやすくなつたことで、自分自身が進めてきた課題解決までの道筋やその方法の工夫と成果の関係が理解しやすくなつたからであるといえる (図 3)。また、生徒は見通しをもつて活動に取り組むことができ、学習のつながりを感じながら、粘り強く課題に取り組むことができた。これは、自身の学習の過程や成長を、経過と共に実感できることによるものと推察される。さらに、ジグソーラー学習法を取り入れたことで、課題の達成のために繰り返される工夫とその成果の関係を教師の肯定的な関わりや生徒同士の関わり合いの中で理解していくことができるようになったことも「統制感」の向上に起与したものと考えられる。

「受容感」においても、有意な向上が認められた $\{t(105)=1.805, p<.05\}$ 。これは、ジグソーラー学習法を取り入れ、エキスパートがチームの中でリーダーシップを發揮し、技能のポイントや学習の進め方等を伝えたことで、生徒同士の肯定的な関わりや教え合いが促され、主体的に学習を進めることができた。技能の高低に関わらず、生徒全員がエキスパートとしてポイントを伝えたり、声をかけたりしながら学習を進める経験をすることができた。こうした経験を積み重ねていくことが、生徒のスポーツに対する多様な関わり (する・みる・支える) をすることを実感を伴って知る機会となったことが要因ではないかと考える。また、教師や仲間から受け入れられていることや技能のポイントが分かることからの教え合いや認め合いから自他のよさを見発見することで、「受容感」の向上につながつたと推察される。

これら 2 つの手立てを行うことで、運動有能感合計得点も有意な向上が認められ、運動有能感の向上に大きく起与した $\{t(105)=3.440, p<.001\}$ (図 4)。主体的に運動やスポーツに関わっていこうとする心的エネルギーが向上し、生涯にわたる運動に親しむ態度を養うことへの一助となつたと考えられる。

課題として、「身体的有能さの認知」については、最も点数が低くなつておらず、更なる手立ての工夫が必要である。

PDCA サイクルの学習過程の「Check」の場面において、課題を適切に見出すことや映像に基づいた「Check」の方法を充実させていく、自身の技能を適切に自己評価できるようにしていきたい。

4 今後の展望

今後は、本年度の研究を継続していくとともに、「Check」の場面において、課題を適切に見出したり、適切な課題設定の検証方法を生徒自身が協働的な学習を通して追究したりしていく手立てを充実させていく研究を行いたい。

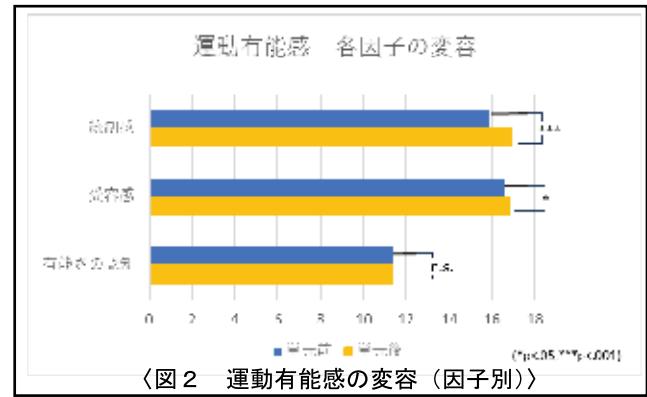
<参考文献>

岡沢祥訓 (1996) 『運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究』 スポーツ教育学研究 . Vol. 16, No. 2, pp. 145-155

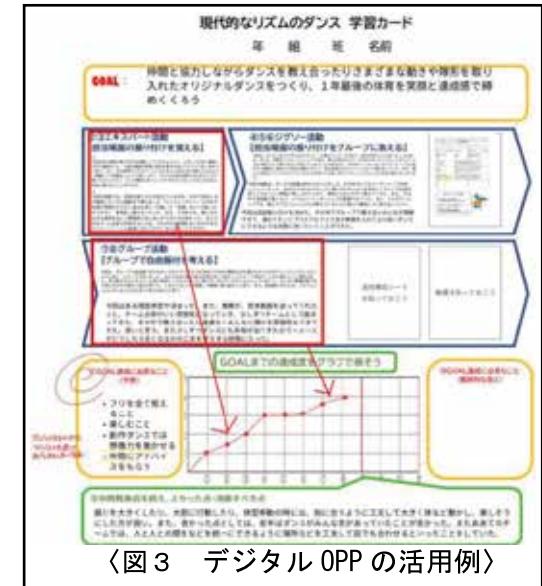
群馬県教育委員会 (2019) 『はばたく群馬の指導プランⅡ』

東海林沙貴 (2018) 『小学校中学年の体育授業におけるジグソーラーJPEの成果に関する研究 - 学習者同士の関わり合いを促すためのプレルボールを基にした易しいゲームの授業実践を通して - 』 スポーツ教育学研究 Vol. 38, No. 1, pp. 1-2

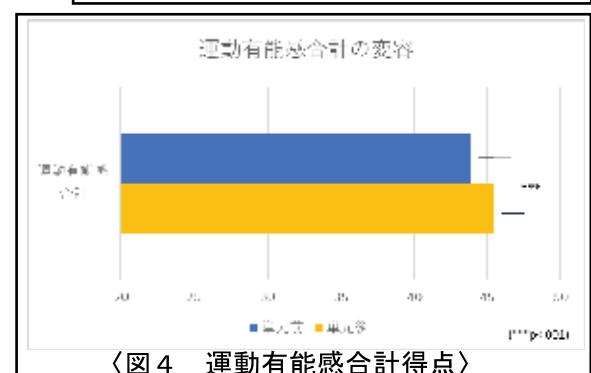
文部科学省 (2018) 『中学校学習指導要領解説 保健体育編』 学校図書



〈図 2 運動有能感の変容 (因子別)〉



〈図 3 デジタル OPP の活用例〉



〈図 4 運動有能感合計得点〉